

『二十四の瞳』考

―大石先生・稲川先生のモデルと抵抗の表現と―

須浪 敏子[†]

一 はじめに

壺井栄と言えば『二十四の瞳』、『二十四の瞳』と言えば小豆島。たいていの人が抱くこの連想を不動にしたのは、小豆島をロケ地にした、木下恵介監督、高峰秀子主演の同名の映画（昭和二年九月）であろう。原作の小説には、小説の舞台は「農村漁村の名が全部あてはまるような、瀬戸内海べりの一寒村」としか書かれていない。風景と人情が溶け合った映画の出来のすばらしさと映像の圧倒的な情報量が、昭和前期の小豆島伝説を作りあげてしまったようである。一二人の子どもたちや村人たちの小豆島東部方言も手伝つてのことだろうが、「岬の分教場」は、苗羽^{のほ}尋常高等小学校の田浦^{たのうら}分教場であり、主人公大石先生の自宅のあった「一本松」は、「猫めがねらむ、ねらむはずだよ、たこじゃもの」と俗謡に唄われた竹生^{たけう}の一本松でなくてはならなかった。しかも、伝説とは普通、その出来事が起こった地名（一）ど

こで」は明らかでも、「いつ」については「むかし、むかし」という曖昧なものだが、『二十四の瞳』は、さすがに小説である。「昭和三年四月四日」から「終戦翌年」の麦秋の頃までと、はっきりした歴史的時間が示されている。そして、この歴史的時間の記述は、小説の現実性を根拠づけるアリバイとして機能している。

このように、昭和二十七年一二月に光文社から刊行された『二十四の瞳』が小豆島をロケ地とした映画化によって、フィクションはフィルムに記録された歴史的事実と混同されるほどのものになった。全面的史実とまではいなくても、「根も葉もある嘘（虚構）」としての小説の根や葉ぐらひは実際にあったことだろうと憶測を逞しくする人も出る。フィクションのもとになった事件やモデル探しに余念のないマニアも出てくる。小説や映画から受けた感動が大きいほど、壺井栄の多くの作品が彼女の生活の身辺を題材にしていることをよく知っていればいるだけ、詮索は熱を帯びてくる。また、筆者のように壺井栄と同郷に育ち、小豆島の昔の言葉や情景を懐かしむ者にとつても、詮索の誘惑は避けがたい。大正の後半に生まれた筆者の父や母も島で教師をしていて、「おとこせんせい」「おなごせんせい」と呼ばれていた。父母の先輩の先生の中に、戦後の民主主義教育の先駆者のような主人公大石先生や、治安維持法のアカ狩り（昭和八年二月からの抵抗教員一斉検挙）で検挙される稲川先生のような人物はいたのだろうかと探ってみたくなる。

二 大石先生のモデルは森静枝さん？

そういうマニアの筆頭格に、香川県人の経済学博士井上正夫氏がいる。井上氏は『古地図で歩く香川の歴史』（同成社、平成二〇年一月）の小豆島のページで、大石先生の「モデルの一部」となった上京前の栄の友人を極めて実証的に特定している。まず、「市の女学校の師範科」卒という大石先生の経歴に着目して、島に一番近い高松市の、唯一師範科のあった明善高等女学校（現在の英明高校）に当たっている。すると、なんとそこには私が大石先生のモデルだと名乗る女性の座談会記録（『明善七十周年記念誌』）が存在した。旧姓森静枝さん。高松市出身、明善女学校の本科から師範科に進み、新卒の三年間（大正一一年四月から大正一四年三月）を小豆島の坂手尋常高等小学校の正教員（正訓導）

として勤めた人物である。学籍記録はもちろんのこと、明善同窓会には、その座談会記録のもとになったなまの肉声テープまで保存されていた。森さんは高松方言で、坂手時代は栄さんと毎晩会うほどの仲良しで、戦後、高松で再会した時には、『二十四の瞳』の大石先生は「あなたの話が半分はいつとんでっせ!」と告げられたと証言していた。外国航路の船乗りと結婚し、教え子に招かれて同窓会で歓待されたのも、大石先生とまったく同じだと、言うのである。もちろん、こんな飄筆から駒のような話に、井上氏が「これは聞き逃せない!」とエキサイトしなかったはずはない。そして、そこからがマニアックな研究者気質を持つ人の本領発揮である。島に足を運んで公的な記録(坂手小学校沿革誌など)に当たる。さらに、明善同窓会名簿をたよりに、もう生きてはいないだろう人の住所に足を運び、近所隣で聞き込みを行い、目指す人の子孫を捜し当てて、事の真相に迫った。壺井栄が本当に「あなたの話が半分はいつとんでっせ!」と言ったかどうか。しかしながら、森さんと栄の再会に同行していた御子息佐伯浩氏の記憶は、母親の発言を肯定するものではなかった。壺井栄はそうは言わなかったというのだ。自分も大石先生のモデルでは?との森さんの質問に、「壺井さんはニコニコしながら『さあ、どうでしょう』と答えた」だけだったというのである。

しかし、そうなら、森静枝さんは大石先生のモデル、いや、モデルの一部でもなかったのだろうか。そうとも言い切れないだろう。井上氏も推察しているように、小説家の立場からすれば人格権に係わる問題にそうやすやす答えることは出来ない。三島由紀夫の『宴のあと』や柳美里の『石に泳ぐ魚』のように裁判沙汰になったら大変だからである。それに、徳永直に離別された妹シンを「妻の座」(昭和二二―二五)でスキヤンダラスに描いて、シンに随分気の毒な思いをさせた後悔の後のことである。壺井栄が慎重に「さあ、どうでしょう」と答えたのは、作家的配慮から出た妥当な答弁であろう。少なくとも、森静枝さんがモデルではないと断言はしなかったのである。そして、「さあ、どうでしょう」という否定とも肯定ともとれる言葉から森さんが「あなたの話が半分はいつとんでっせ!」というメッセージを受け取ったとすれば、それは二人の間の以心伝心の親密さから出たものと考えざるを得ない。

そして、壺井栄の作家的資質を考えれば、森静枝さんがモデルでないと切り切るの方がむづかしいように思われる。普通、小説家はモデルを材料にしながらも、その誰でもない、自分の分身や理想像を創造していく。材料をどれだ

け芸術的に昇華させて作家のメッセージを体现する人物を作るかが小説家の腕前である。しかし、壺井栄の場合は材料に寄りかかって加工度や昇華度をあまり気にせず、人生のありのままを素朴に物語りたいタイプである。材料の幅も狭く、家族や親戚、親しい知人の人生が軒並みモデルにされている。写实的ではないが、私小説型の物語作家である。編集者から「いつも小豆島でもないでしょう」と言われ、ご本人も「わたしのような作家の書き得る幅というようなものはなかなかひろげられない」（「わが小説―『襦袢』昭和三十六年一月」と、その傾向を認めている。しかも、森さんは栄が子どもの頃からなりたくて仕方がなかった憧れの小学校教師（正訓導）であった。女性教師が登場する栄の小説は多いが、『二十四の瞳』以外でもどこかで森さんがモデルになつていないとは限らないのだ。と思つて探すと、予想に反せず『二十四の瞳』以前に、「さあ、どうでしょう」としらをきれないほど森静枝さんによく似た新米教員が登場する短編小説があつた。「女傑の村」の一編、「磁石」（昭和一六年八月）である。「高松市の私立女学校の師範科を出た」新米教師「田宮節子」が海を渡つて「田舎」の「船着き場である村」の小学校へ赴任する。ここでも担任は一年生なのだが、当時のモンスター・ペアレンツにねじこまれて泣かされる話である。そして、その村は思いのほか「都会文化の影響」を受けていて、「彼女の故郷である町と大して変わらないほどの一面を持っていた」と書かれている。島東部の交通の要所であつた栄の故郷坂手村へ、明善の師範科を出てすぐに高松から赴任した一七、八の森静枝さんを彷彿とさせる小説である。『二十四の瞳』では新米の大石先生をからかったりいじめたりしようと待ちかまえるのは高等科や五、六年生の児童だが、こちらはモンスター・ペアレンツの襲撃なのである。また、「磁石」の「田宮」先生も大石先生と同じく子ども本位の自由な教育観を持つていて、「成績など、どうしてそんなに目に角立てて気にしなければいいのか、子供供らしく自然に育てられる知恵のひらめき」が大切だと考えている。戦前の標準的な教師が子どもに求めていた「学力優秀」「学業勤勉」「品行方正」などの徳目に彼女はこだわっていない。ひよつとすると、「磁石」は『二十四の瞳』のデッサン画の一枚だったのかもしれない。

このように見てくると、「大石先生とは一致しない点もある」と断つた上で、井上正夫氏が次のように結論づけているのは、実証に立つた誠実な見解だと思う。

壺井栄さんとの交際や、森静枝さんが「市の女学校の師範科」の卒業生であること、またハイカラな服装や文化への理解、船乗りとの結婚、さらに大森小森の話（作中で大石先生が大石小石とはやされ、「小石先生」と呼ばれることになる話の元ねた。須浪注）などの大石先生との共通点を考えたら、やはり、森静枝さんは大石先生のモデルの一部だと考えざるをえない（『古地図で歩く香川の歴史』、七九頁）。

しかし、自分も大石先生のモデルなのでは？と作家に直接問い質した森さんの深い確信を思うと、周辺の人でそれに気づいていた人は誰もいなかったのだろうか。と、勘ぐってみたくなる。プロレタリア作家になる以前の黒島伝治や青年画家大塚克三と交際していた郵便局員岩井栄が村中の噂となり、巡査までが恋愛はいかんと触れ回った大正末期の坂手村のことである。高松市からやってきた若く美しいハイカラな森静枝先生と栄の交際が狭い村の中で目立っていなかったはずはない。たぶん、坂手村辺りでは大石先生のモデルは知る人ぞ知るだったのではないか、と思っていると、やはりそうであった。坂手尋常小学校高学年で森静枝さんに教わり、壺井繁治、栄夫妻と同郷の共産主義者として親しかった久留島義忠氏（昭和六三年当時、日本共産党兵庫県委員会顧問）が『二十四の瞳』のモデルの原点」（『オリーブの樹標』青磁社、昭和六三年九月）でこう語っていた。

あのおなご先生は、三人の実在した女教師を一人の先生に創作されたという点で、私と栄さんの妹たちとの話が一致している。モデルの一人は妹のおしんさんで、当時、分教場の裁縫の先生をしていた。おしんさんは、毎日歩いて岬の分教場へかよっていたのである。：略：次の自転車でかよっていたおなご先生も、私の村にいたのである。

その人は、私と小学校の同級生で、高松の明善女学校を出ると、代用教員として、田ノ浦分教場に勤めていた。毎朝私も自転車で草壁小学校へかよっていたので、往復の道でよくいっしょになったものである。彼女は和服でなく、洋服で毎日かよっていた。：略：またこの小説では、船乗りと結婚して、夫が太平洋戦争で戦死し、未亡人となるストーリーがある。そして戦後岬の対岸から息子に小舟の櫓をこがせ、岬の学校へ行くおなご先生のモデルは、私の小学校の五、六年生のときの受持ちであった森先生であろうということだった。この森先生は、非常にやさしい先生で、岬の小学校の対岸にある、有名なオリーブの丘のある西村へ、高松通いの船乗り嫁に嫁いでいったのである。

やはり、ご本人だけでなく周りの人も森先生を大石先生のモデルだと気づいていたのである。ただ、この文章は三人のモデルの年齢や勤めた時期がわかりにくいし、森さんの結婚相手を「西村」の「高松通いの船乗り」とする記憶違いがないわけではない。しかし、それ以上に教え子が述懐する「船乗り」と結婚した「非常にやさしい先生」という森さんの印象は、大石先生のキャラクターと重なりあう。さらに、森先生モデル説の信憑性を高めてくれるのが、栄のすぐ下の妹シンの証言だ。「渋谷道玄坂」や「妻の座」で古風で融通の利かない正直者と描かれている彼女は、小豆郡立小学校教員養成所を卒業して森さんと同じ大正十一年四月に苗羽小学校（准訓導）に就職している。狭い内海地区で一緒に教員生活を始めた間柄だ。立場は、シンは身分も給料も低い田舎者の先生、森さんは都会から来たハイカラな格の高い先生。当時評判になったというチューニックススタイルでダンスを教える森さんを、彼女は特別な思いで心に焼き付けていたことだろう。もちろん、姉の友人として、末の妹の学校の先生としてもよく知っていたにちがいない。そんなシンが言うのだから森さんは大石先生のモデルにちがいないだろう。では、もう一人のモデル、洋服姿で自転車に乗って田浦分校に通う明善女学校卒の代用教員はどうだろうか。彼女について一番よく知っているのは小学校が同級で昭和五年八月末から昭和八年三月まで草壁尋常高等小学校の正訓導だった久留島氏だ。森先生から見れば明治四十四年生まれの教え子世代で女学校の後輩。昭和三年三月以降に先生勤めをした人である。しかしその時期、壺井栄はすでに東京在住であり、島に帰っても共產主義者の妻として白眼視されていたから、このモデルとはどれほどの親交があったのだろうか。少なくとも、シンや森さんと同じように近く親しい間柄というわけにはいかなかっただろう。この時期の田浦分校の教員録が失われているので断定はできないが、島娘のモダンガールの登場という外形だけを小説に借用したのではないだろうか。そう考えてくると、プロフィールとキャラクターを併せ持つモデルは森さんだけということになる。大石先生モデルの比重は森さんが格段高いことになるのである。

ところが、井上氏の『古地図で歩く香川の歴史』によると、壺井栄は静枝さんより遅く坂手小学校に赴任したもう一人のおなごせんせい、大正十三年二月に香川県女子師範卒業の新米教師森ハルミさんも知っていた。森静枝さんほど懇

意ではなかったらしいが面識があり、高等小学校時代優等生だった栄が目指していた正統派タイプの先生である。官費で五年の正課を終えた、より格の高い先生だ。にもかかわらず、森静枝さんがモデルに抜擢されたのはどうしてだろうか。栄の教師を見る眼、教師に対する考え方が昭和三年から関係していたプロレタリア解放運動の中で大きく変更されていたからである。師範出の教師は天皇絶対制を堅固に維持するために養成された聖職者であり、無産者大衆や子どもの人権を抑圧蹂躪してはばからない体制派であると考えようになっていたということだ。実際の森静枝さんが反体制的で森ハルミさんが天皇制の支柱である保守の典型的先生であったというのではない。戦前における子どもも本位の「教え子のよき友」（「花のいのち」昭和一八年七月）である教師を描こうとすれば、大正デモクラシーを背景に設立された明善女学校出の静枝先生の方がはるかにモデルにふさわしい条件を備えていたということである。ちなみに、師範出のバリバリの女教師は「生徒に笑顔など見せるのはこけんにでもかわるというように、冷たくかまえていました」（「裾野は暮れて」昭和三〇年五月）と描かれている。栄は新しい時代のおなごせんせいを「順良・信愛・威重の気質（師範学校令第一条）」を備えた従来の師範タイプとは一線を画する形で描きたかったのである。「生徒がよくなく」（『二十四の瞳』の「羽ばたき」自由で型破りなヒロインには、子どもに「非常にやさしい」、一年制の「市の女学校の師範科」を出たハイカラな静枝さんのイメージが打って付けで、それを膨らませて昭和初年代のおなご先生を作ればよいと考えたのであろう。洋服に自転車姿の外形の「モダンガール」は新しい児童観や教育観のモダンをも象徴すると考えたのであろう。

そして、静枝さんのプロフィールやキャラクターをベースに、実際にはあり得ない理想の教師像を壺井栄は描いたのである。まずは、「天皇陛下は、おし入れの中におります」（「まほうの橋」）という小学一年生の仁太の奇抜な答に「なみだを出してわらい」出す大石先生である。「ほかの生徒もわらい」「わらいは教室をゆるがし、学校の外までひびいていったほどだった」という状況を作りながら、天皇の卑小化に気づかない新米教師である。国を挙げての一大イベント、新天皇の即位の御大典が行われるその年（昭和三年）にこのような不敬を犯す教師は珍しいだろう。改悪治安維持法に苦しめられた栄だからこそ、箸が転んでもおかしい年頃の大石先生にそれをやらせたのである。また、当時、子どもが

好むからといって、学校の唱歌の時間に「あわて床屋」や「やまのからず」など、文部省唱歌でも文部省認可童謡でもない『赤い鳥』のはやり曲ばかりを選んで教える大胆不敵な教師などいるはずがない。そんな自由は教師にはない。監督の行き届かない僻地だからあり得た新米教師の無鉄砲な逸脱行為として描かれているようだが、モデルの森さんは母校で香川師範と変わらない唱歌指導を学んでいる^⑤。そして教師の教材選択の自由はマルクス主義の教育、日本教育労働者組合と新興教育が初めて要求したものであることを承知の上で、栄は大石先生に文部省が認めない曲ばかりを教えさせたのである。さらに「小学校四年生の父が、受け持ちの先生に誤解されたことをおこって、級友をそそのかして一日ストをやった」「(わかれ)」というエピソードに大石先生は「まじめに」感動し、教師と対等に渡り合う子どものストライキに理解を示す。が、これにもモデルの森静枝先生はびっくり仰天することだろう。そして、小学校五、六年生の松江や富士子が安価な労働力として親に売られ、竹一や正が軍国少年に仕立てられて兵力として大人に利用されることを嘆き怒るのは、プロレタリア文学運動の中枢にいて子どもの生存権や学習権の獲得を目指していた壺井栄自身である。下士官になって出世したい正に「どうしてそんな、軍人になりたいの？」(「羽ばたき」)と聞き、松江がむりやり一家の主婦の役を受け持たされたとき、「法律はこのおさない子どもを学校にかよわせることを義務づけているが、そのために子どもをまもる制度はないのだ」と、大石先生に言わせているのも、壺井栄自身である。戦前において臣民の三大義務の一つとされていた教育を、本来国民一人一人の権利であるとの認識を栄は持っていたのである。「ピオニール(ソ連・共産圏の少年団運動が日本に輸入されたもの。須浪注) よ！ とともに」「(働く婦人)昭和七年九月二五日)や「だからこそ」「(女人芸術)昭和七年五月号)で将来を担う子ども達と肩を組んで階級闘争を闘わねばならないと言った栄は、子どもの人権解放についてかなりよく知っていたと思われる。戦前において「彼らをして生存の権利を主張せしめよ！」(本庄睦男)と叫び、子どもの学習権や教師の教育の自由を革新的に訴えたのは、マルクス主義の教育観を措いて他なかったのである。

三 アカの先生のモデルは久留島義忠氏

ところで、この大石先生のモデルについての貴重な情報を提供してくださった久留島義忠氏もまた、『二十四の瞳』と関わりの深い人物であった。子ども本位の自由な教育観を持つ大石先生がいたたまれずに退職するきっかけとなった近くの町の赤色教員稲川先生逮捕事件（昭和八年二月の長野県を皮切りに全国に広がった抵抗教員一斉検挙事件）、その稲川先生のモデルが実は、この久留島義忠氏であった。そしてこちらは、作家の証言とモデルの言い分が一致する疑いようなないモデルである。昭和八年度分「特高月報」（内務省警保局保安課編）や「草壁尋常小学校沿革記録」（昭和八年三月三十一日付け免職の記載）も事件が事実であったことを証拠立てている。壺井栄は『二十四の瞳』出版後、次のように言い、それを受けて久留島氏がアカの先生は私だと回想記『オリーブの樹標』で事件の詳細や昭和四年夏以来の壺井夫妻との親密な交流を語っている。

小説（『二十四の瞳』、須浪注）のモデルは具体的にはなにもない。しかし、広い意味のモデルは日本中にある。赤い先生の例は小豆島にも二十年くらい前にあった。原作にタマゴ一つずつを児童が持ちよって、留置場に差し入れるところが出るが、それは実際にあった。（『ある抵抗』『週間朝日』昭和二十九年一〇月三日 七―八頁）

そして、この久留島逮捕の事件は壺井栄が実際にいくわし、痛恨の思いで心に深く刻んでいた事件だった。昭和八年三月一四日に父親が他界し、その弔いのために栄は急遽島に帰った。ちょうどその時、治安維持法違反で逮捕された久留島氏が留置場から脱走し、内海五ヶ村全消防組員を挙げての大搜索の末に、再逮捕（昭和八年三月一三日午後八時三〇分）されていたのである。当時の新聞「香川新報」はデカデカと「留置場破りの赤色教員遂に逮捕」（昭和八年三月一七日夕刊、二面）の見出しを掲げ、内海地区の住民の騒ぎは収まるどころでない状況であった。しかもバレはしなかったが、末の妹貞枝が脱走逃亡を支援して資金提供をしていた。近しい小豆島地区フラクションの逮捕と妹への嫌疑に、栄は胸も張り裂ける思いであっただろう。そして、この事件を二月にあったばかりの小林多喜二の拷問死事件などと思い合わせ、共産主義運動の息の根が止められようとしていることをひしひしと感じただろう。小説「遠い空」（昭和二

二年四―七月）にはこの事件が「井田先生」の事件として詳しく描かれている。ただ、『二十四の瞳』にはこの脱走事件は省かれ、昭和八年三月三日の治安維持法違反容疑逮捕だけが描かれている。

では、『二十四の瞳』のアカの先生のモデル、久留島義忠とはどんな人物で、どんな先生だったのだろうか。ご本人の回想記『オリブの樹標』から掻い摘んでみよう。

氏は明治四四年二月二七日、小豆島の坂手村に生まれた。本来天皇制の精神的支柱となる教師養成のための師範学校、香川県立師範学校の第一部に大正一四年に入学して五年の正課を終えた。その後、昭和五年に草壁尋常高等小学校に就職した。しかし、関西の日本無産青年同盟の常任委員をしていた兄平治の影響もあって在学中から社会主義思想に深い関心を寄せていた。当時香川県は農民運動の日本一盛んなところであり、それを背景に昭和三年二月の衆議院総選挙では労働党の大山郁夫が香川県から出馬した。結果は激しい弾圧による敗北であったが、非合法の共産主義陣営からの応援も盛んで河上肇や中野重治が選挙応援演説のために掛けつけた。それ以前にマルクス主義経済学者の堀江邑一（川上肇の一番弟子）が高松高等商業学校に着任していて、学生に大きな影響を与えていた。軍事教練反対のハンガーストライキなども打たれていた。そして師範学校の寄宿舎はたまたま、そのマルクス主義学生運動の拠点と隣り合っていた。赤い主義の波は当然、天皇制の砦である師範学校にも及んだのである。久留島氏も血を騒がせながら高商の活動家と交流し、「単に理論の研究だけでなく、実際活動を何かの形ですることこそ、階級的自覚のある青年の義務だ」と思い、学内にそのグループをつくることを考えた」と言う。壺井夫妻との関係が出来たのもこの頃、昭和四年の夏であった。繁治は、いわゆる三・一五事件、四・一六事件で壊滅状態になった香川の農民運動の現況調査のために帰省したのだが、ナツプ（全日本無産者芸術連盟）の主要メンバー（その秋からは、発禁処分に近いながらも発行部数を増やし続ける雑誌『戦旗』の出版責任者）として、当局の要注意人物となっていた。その繁治との会合が特高警察の知るところとなったのだから、氏は一躍、師範学校でただ一人の要注意人物となったのである。

久留島氏の草壁尋常小学校着任記録が昭和五年八月三一日付になっているのも、いわば就職延期の懲戒処分的意味合いからであった。満一九歳の久留島氏は、特高の監視つきで草壁小学校に着任したのである。しかし、ひるむことなく、

学校現場に共産主義的教育、新興教育運動を持ち込んで実践し始めた。教育労働者と醬油工場労働者の連帯組織作りに奔走する一方で、学校では反戦平和の教育、無産者階級のための教育闘争を具体的な子ども達の生活に結びつけて行っていた。新興教育の多くの教師と共に、「相次ぐ経済恐慌など資本主義社会の諸矛盾の下で呻吟している子どもたちの姿を捉え、その子どもたちを解放するためには社会の仕組みというようなもの、あるいはその社会における人と人の関係、支配、被支配の関係というもので視野に入れ、そのところを打破しないと根本的な解決はあり得ないという認識を持って運動に参加していった」⁶。高学年の子ども達に新聞を読ませて社会的関心を開かせ、飢饉に苦しむ東北地方の子ども達への自発的カンパを思いつかせる。自分の家の暮らし向きに目を向けさせ、「貧乏」という題で作文を書かせるといった教育。社会科学的な観点から自分の家庭の生活や社会を見る目を育てようとしたのである。そして、子どもの側からすれば、被差別部落の子どもも差別しないで可愛がり、教育勸語の暗誦も軽減してくれる、暖かくてちよつと風変わりな懐きやすい先生だったということである。

また、絵画が得意で、栄の繁治宛書簡（昭和五年二月一三日付け）などにも「プロ（レタリヤ）美術の展覧会も見ました。…略…義忠さんも三品出品していました。なかなか上手だそうです」と書かれている。師範の美術の教師に美術学校へ行くことを勧められたほどの腕前で、師範三年生の冬休みにはすでに有名であった猪熊玄一郎の美術講習会にも参加している。そして猪熊講師に「プロレタリア美術こそ、新しい日本のルネッサンスを展望するものだと思う」と議論を吹きかけたと言うのである。『二十四の瞳』の大石先生は多くの子どもが好む唱歌の時間を得意としたが、久留島先生も子どもを忠君愛国の重圧から解き放つ、楽しい図画の時間を得意としたらしい。国定教科書に縛られた戦前の小学校教科の中で、子どもがのびのびと本来の姿を発揮できたのは、体操と唱歌や図画、そして国語科綴り方くらいのものであっただろう。

四 なぜ、大石先生と稲川先生は交流がないのか？

ところで、小説の世界に話をもどすと、戦争嫌いと子ども本位の教育など共通点が多いのだが、大石先生と稲川先生の間には直接的な交流は全くない。子どもに「反戦思想をふきこみ」、生活綴り方文集『草の実』を作ったという理由で、稲川先生は牢獄に繋がれるのだが、それを不当と思っても、大石先生は何ら行動に移すことがない。『草の実』のつづり方を、かんしんして、うちの組によんでかし」（『月夜のカニ』）、「忠君愛国」が嫌で軍国少年達に「どうしてそんな、軍人になりたいの？」（『羽ばたき』）と、大石先生もたづねるのだが……。安価な労働力や兵力として大人の言いなりにされる子どもを憂い、子どものストライキ権にも理解を示す、似たもの同士の近隣の教師同士なのに、逮捕事件の前にも後にも交流はない。いわば確信犯のアカの教師と自然発生的アカの教師は道ですれ違うことさえない。「国定教科書をとおしてしかむすびつくことをゆるされない」、「教師と生徒の関係が、これでよいのかと疑問をもつと、そこに出てくる答えは、稲川先生であった」（『羽ばたき』）と、留置場まで教え子が慕っていくアカの先生を、大石先生は敬愛もし心の拠り所とする。しかし、彼女は稲川先生に直接、接する行動を起こさない。彼の消息を知るのは噂からばかりである。そして、最初の教え子の岬の一二人を卒業させると、同僚の間で「なんとなくめだち、問題になっていた」彼女は、教師を辞めてしまう。軍国主義教育推進の歯車であることを辞めること、それが大石先生の精一杯の抵抗だったということなのだろう。しかし、普通の主婦となり三人の子どもの母親となった、事件の八年後（七重八重）でも、不遇に暮らす稲川先生に励ましの手紙一本、言づて一つしかない。なぜなのだろうか。どうして、作者はそこまで二人を引き離さなければならなかったのだろうか。単行本『二十四の瞳』はレッドパージも解除された昭和二十七年秋以降に大幅に手入れをされた小説であるから、子どもの人権を守る使命感に貫かれたアカの教師と子ども思いの嘘がつかない女教師が手を携えて成長していく小説も書けたのではないだろうか。筆者などは、もし大石先生と稲川先生が知り合っていたら、どんな大冒険と大ロマンズが起ったのだろうかと胸をわくわくさせてしまうのだが、どうだろう。筆者と同じような感想は古くは来栖良夫『二十四の瞳』について（『文学』昭和二十九年二月）、最近是小野祥子「責任解

除の快感』（『前夜』第一期三、平成一七年四月）などによって言われている。

実はこのような僭越な批判が作者に向けられるのは、教職を退いた後の大石先生があまりにも生彩を欠くからだ。作品で言えば八、九、十章に当たる「七重八重」「なきみそ先生」「ある晴れた日」の大石先生である。初めて教壇に立った日の大石先生は一年生のひとみが「それぞれの個性にかがやいて」いるのを見て、「このひとみを、どうしてにこしてよいものか」と意気込んだ。その澆漓とした意気込みはどこへいったのだろうと思うからである。貧しい村の子ども達との六年にわたる関わりの中で、子どもの人権獲得や人間解放の急務に気づきつつあった前向きな大石先生は、妻であり三人の子どもの母親である家庭人となることで、急速に視野狭窄を起こしてしまっている。「満州事変・上海事変はつづいておこり、いくにんかの兵隊が岬からもおくりだされた。そう言う激しい動きの中でおさない子どもらは麦飯をたべて、いきいきとそだった。前途になにがまちかまえているかを知らず、ただ成長することがうれしかった」。（『花の絵』）というような、侵害されてはならない子どもの命の生長と開花を守る教師の使命感といったものが、忘れられていく。

軍国主義に「大吉の母は、一どもそれにさんせいしなかった」とナレーターは言うが、それは子ども本位というより、子どもを産み育てる「日本の母たちのころ」の蹂躪という狭い立場に後退している。「人はなんのために子をうみ、愛し、そだてるのだろうか。砲弾にうたれ、さけてくだけてちる人のいのちというものをおしみかなしみとどめることが、どうして、してはならないことなのだろう」という大石先生の怒りの高まりの中に、果たして母親のエゴイズムがないと言い切れるだろうか。日本の母たちの悲しみはまた敵国の母親のものでもあるという広い立場に立てているだろうか。与謝野晶子は日露戦争の最中に発表した反戦詩「君死にたまふこと勿れ」の中で「すめらみことは戦いに／おほみずからはい出まされ／かたみに人の血を流し／獣の道に死ねよ」と、戦争を人間の道でない「獣の道」と言い切っている。母親となった大石先生の反戦の根拠は明治の反戦詩の根拠にさえ及ばなくなっているのではないだろうか。

そして、心の中で反戦を叫び続ける大石先生も、大日本婦人会の銃後の戦争協力を行動として拒むことはできなかったはずである。教壇を降りたからと言って戦争に加担せずに済むわけではなかった。それなのに、戦争に係わったすべ

ての者が加害者であり被害者であるといった正直な認識を彼女は持たない。戦争に抵抗仕切れなかった者の痛恨がない。あるものは、偏に戦争の犠牲者としての追憶と感傷である。太平洋戦争に突入した春を描いた「七重八重」では、徴兵逃れのために船乗りになった自分の父や例の稲川先生がすでに過去の抵抗の系譜として追想されている。終戦翌年の四月を描いた「なきみそ先生」では、戦争犠牲者家族である大石家の惨状が追憶され、「ある晴れた日」では、岬の分教場の教え子たちの戦争被害が感傷の涙で振り返られているといったふうである。本来「ある晴れた日」は作品全体の結びの章として、戦後の未来に向けて教え子たちと共に再出発する大石先生の教職復帰が描かれようとしているのだが、果たして彼女は主体性を持った民主主義時代の教員になれるのだろうか。もし、彼女がアカの稲川先生と知り合っていたなら、教師を辞めても、子ども本位、人間本位の教育を実現させたい情熱は失わなかったのではないだろうか、と思ってしまうのである。『二十四の瞳』を小説構造の観点から言うと、ぼんやりした遠近法の焦点にアカの稲川先生がぼつりと置かれ、前面に大写しされる大石先生の半生はナレーターの歴史解説の助けで焦点と結ばれているという形なのである。

しかし、『二十四の瞳』が高く評価されるのは、来栖良夫が言う通り「おとなと子どもの生活関係を歴史の中にとらえようとする」子どもも読める小説のはじめての試みだったからである。昭和三年四月から昭和九年三月まで、また太平洋戦争勃発の昭和一六年、そして終戦の翌年という時間軸の取り方とその解説の仕方にプロレタリア解放運動を戦った壺井栄の人生の立場が踏まえられているが、その悲劇的時間の中を大石先生と岬の子ども達は手を取り合って生き抜いたのである。「ジオニールよ」とともに「と呼びかけた栄は、やはり子どもにも歴史的発展の可能性を期待し続けたのである。雑誌『ニューエイジ』の初出と光文社版『二十四の瞳』を比べて驚かされるのは、生彩を放つ大石先生は改稿の時点で現れたということである。加筆は大石先生の教師時代に集中している。小学生でストライキをやった父親に感動する大石先生も、子どもの学習権の保障を咄く大石先生も、反戦思想を教えて逮捕された稲川先生への傾斜も、「どうしてそんな、軍人になりたいの?」と軍国少年をなじる大石先生も、改稿時点で描かれたのである。雑誌連載の休止を申し込んだほど体調の優れなかった栄が連載終了後に力を振り絞って大石先生を理想の教師に仕上げ直したのである。

光文社版『二十四の瞳』のあとがきで、栄は執筆時の状況を「越中島の保安隊本部で隊員を前にして『国軍の基礎たれ』と訓示した首相の言葉が、その日の写真とともに報道された時なども、私は机の前にすわっていることに苦痛を感じて落ちつかなかったのを思い出します。」と書いている。戦後の再軍備が進行し共産主義者への締め付けが強まる中で行われた『二十四の瞳』の改稿はさまざまな意味での壺井栄の精一杯の抵抗だったのかもしれない。

注

(1) 壺井栄は「児童文学というもの」(『東京新聞』昭和二八年五月四日)の中で『二十四の瞳』を子どもにも読める小説として書いたと言っている。

(2) 黒島伝治は未発表の小説「呪われし者より(K姉に)」(大正六年頃)の中で、郵便局勤めの栄とのぎくしゃくした恋愛関係を描いている。二人の中が村中の噂となつて巡査が栄に圧力を掛けたことも書かれている(『定本黒島傳治全集』第一巻、勉強出版、平成一三年、三頁)。

(3) 森静枝さんが嫁いだのは肥土山(小豆郡土庄町)の作り酒屋佐伯氏。外国航路の船乗りであつた夫君は大正一四年の結婚を契機に旧国鉄宇高連絡船南海丸の機関長に転職。佐伯夫妻は一年半の肥土山暮らしの後、高松に転居。以上は、佐伯静枝さんの三女煙草谷氏の談話として、井上正夫氏より御教示いただいた。

(4) 大石先生が教えた「あわて床屋」「この道」「ちんちん千鳥」「お山の大将」「鳥の手紙」はすべて『赤い鳥』の童謡である。『赤い鳥』の童謡は文部省唱歌への批判から生まれ、子どもの言葉を用い、子どもの生活感情に近づき、しかも芸術性の高い歌を目指して作られた。子どもや学校現場からの強い支持を受け、文部省もその中の数曲を認可歌曲とせざるを得なかったが、大石先生が教えたのは認可歌曲外のものである。(堀内敏三・井上武士編『日本唱歌集』ワイド版岩波文庫五四、二六三―二六四頁)「私の読書経路」(昭和二十九年五月)や「茶の間日記」(昭和二十年一月二三日)によると、上京以前に栄は『赤い鳥』を毎月買つて読んでいたと言う。

(5) 『香川県明善学園五十年史』四八頁。

(6) 柿沼肇 「新興教育運動と『二・四事件』(長野県教員赤化事件)の社会的意義」(日本福祉大学『研究紀要』第一二号、平成一七年三月、三八頁)。

(7) 坪田理基男 「『二十四の瞳』の思い出」(壺井繁治・戎居仁平治編『回想の壺井栄』私家版、昭和四八年八月、四三―一四七頁)。

この稿を書くに当たって、地域研究家の井上正夫氏、英明高校の田山泰三先生、本学の元井一郎先生から多くの御教示を受け、星城小学校、苗羽小学校に御協力いただいた。深く御礼申し上げたい。